

令和4年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同研究班」 研究報告書

令和5年7月12日現在

|       |                 |                         |             |
|-------|-----------------|-------------------------|-------------|
| 研究課題名 | 国家の生存戦略に関する共同研究 |                         |             |
| 担当者   | 氏名              | 所属機関・職                  |             |
|       | 宇山 智彦           | スラブ・ユーラシア研究センター・教授      |             |
| 班員    | 氏名              | 所属機関・職                  | 専門とする研究分野   |
|       | 吉村 貴之           | 早稲田大学ロシア東欧<br>研究所・招聘研究員 | アルメニア近現代史   |
|       | 研究テーマ           |                         |             |
|       | 小国の生存戦略         |                         |             |
| 班員    | 氏名              | 所属機関・職                  | 専門とする研究分野   |
|       | 秋山 徹            | 北海道教育大学釧路<br>校・准教授      | 中央ユーラシア近現代史 |
|       | 研究テーマ           |                         |             |
|       | 山岳地域の集団の生存戦略    |                         |             |

## 研究成果の概要

2022年度は、ロシアのウクライナ侵略戦争によって、まさに国家の生存が問われる年となった。この班では、旧ソ連諸国・諸民族の生存戦略を、現状と歴史にまたがって研究した。

隣国ウクライナの生存を脅かすだけでなく、自国の存在基盤をも揺るがしかねない侵略戦争をプーチン体制下のロシアが始めた理由については、歴史観と国際政治観の両面から研究を進めた。その結果、この戦争の背景としては客観的な安全保障環境よりも、ロシアの大国としての威信や、欧米に対する一方的な被害者意識の方が重要であり、そうした感情をウクライナなどの特定の地域にぶつける「感情の地政学」ともいべき現象が起きていることを指摘した。

戦争はウクライナとロシア以外の旧ソ連諸国にも影響を与えており、特にコーカサスでは、ウクライナにかかりきりのロシアによる平和維持のメカニズムが機能しにくくなっている。2020年の第2次ナゴルノ・カラバフ紛争で事実上敗北したアルメニアは、欧米、イラン、トルコとの関係改善・強化を図っているが、大国を動かせるリソースは乏しい。他方国内政治では、パシニアン首相が批判を浴びつつも、野党の不人気もあって政権を維持できていることが興味深い。アルメニアの生存に大きな影響を与え続けるナゴルノ・カラバフ問題の歴史的経緯を改めて精査するために、班員の吉村は、エレヴァンにあるアルメニア共和国国民文書館ならびにアルメニア共和国国民図書館で、1960～70年代のナゴルノ・カラバフ自治州についてのソヴィエト・アルメニア

**研究成果の概要（続き）**

内の政策文書や知識人の議論に関する文献を調査した。

中央アジア諸国は、ロシアと関係を維持しつつも戦争とは一線を画し、ロシア以外の諸大国やEUとの関係を強化しつつある。このように複数の大国と距離を置きつつ関係を結ぶことによって生存を図る戦略は、18-19世紀の山岳遊牧民を彷彿とさせる。また、カザフスタンがロシアへの警戒を強めつつあることは、ステップ地域に位置し外界に開かれていることが戦略的脆弱性にもつながるといふ、ウクライナと共通する歴史的特徴を持っていることと関係している。

ウクライナ侵略戦争はまた、旧ソ連地域に関する歴史研究のあり方の見直しを迫っている。宇山と秋山はロシア帝国に協力または抵抗した中央アジア現地有力者たちを研究してきたが、現在プーチン政権に協力または抵抗しているロシア・ウクライナの人々のロジックと比較することで、大国の脅威や影響のもとでの「生存」の問題をいっそうのリアリティをもって考察することが可能になりつつある。

以上の諸問題について、班のメンバーの間で随時意見交換したうえで2023年2月28日の本班の報告会で議論し、共通理解の形成を図った。

**主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。**

秋山徹「遊牧英雄の黄昏、民族英雄の黎明：民族創成過程における対露協力者の位置づけをめぐる」野田仁編『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2023年、159-177頁。【謝辞無】

秋山徹「ソヴィエト・クルグズスタン成立史の一死角：或る兄弟の軌跡 1911-1927」『史流』第50号、2023年（近刊）。【謝辞有】

宇山智彦「ウクライナ侵攻は中央アジアとロシアの関係をどう変えるか：戸惑い・危惧と変化への胎動」『UP plus ウクライナ戦争と世界のゆくえ』東京大学出版会、2022年、97-106頁。【謝辞無】

宇山智彦「ウクライナと中央ユーラシア：歴史的関係とロシアによる侵略戦争の衝撃」『内陸アジア史研究』第37号、2022年、1-15頁。【謝辞無】

Tomohiko Uyama, “Unmasking Imperial History: Emotional Empire, Violent Politics of Difference, and Independence Movements in the Name of Autonomy,” *Ab Imperio*, 2022, no. 1, pp. 121-126. 【謝辞無】

宇山智彦「感情とイメージの地政学：ロシア・ウクライナ紛争とアフガニスタン情勢に寄せて」日本国際フォーラム編『ユーラシア・ダイナミズムと日本』中央公論新社、2022年、111-127頁。【謝辞無】

小松久男編集代表『中央ユーラシア文化事典』丸善出版、2023年（秋山、宇山、吉村がそれぞれ関連諸項目を執筆）。【謝辞無】

**当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）**

以下の研究プロジェクトが採択された。研究期間はいずれも2023-2026年度である。

- ・科学研究費基盤研究(B) 23H03613「大国主義の現代史」（研究代表者：宇山智彦）
- ・科学研究費基盤研究(C) 23K00876「近代中央アジア遊牧民のプロト・ナショナリズムをめぐる実証的研究：クルグズを中心に」（研究代表者：秋山徹）